

令和6年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立 赤坂 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、6年生を対象として、令和6年4月18日（木）に、「教科（国語、算数）に関する調査」、文部科学省が指定した日（4月10日から4月30日の間）に「児童質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査（国語、算数）

教科に関する調査（国語、算数）	
①	身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
②	知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

(2) 児童質問調査

児童質問調査	
<input type="radio"/>	学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※本校の6年生については、単学級ですので個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査（国語、算数）の結果

本年度の結果	国語		算数	
	平均正答率	平均正答率	平均正答率	平均正答率
本市	9.3	66	9.6	60
全国	9.5	68	10.1	63

(2) 本校の学力調査結果の分析

教科	全体的な傾向や特徴など	無回答率が低く、粘り強く問題に取り組んでいることがわかる。また、目的や意図に応じて、伝えたいことを明確にする内容の正答率は全国平均を大きく上回った。一方で、漢字を正しく使ったり、主語述語の関係を捉えたりするなどの、言葉の使い方に関する問題の正答率は低く、課題がある。
国語	よってきた問題	・目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にする問題 ・話し言葉と書き言葉の違いに気付くことができる問題
	努力が必要な問題	・漢字を文中で正しく使うことができる問題 ・文の中の主語と述語との関係を捉えたりすることができる問題
	全体的な傾向や特徴など	国語科と同様に、全国平均と比べて無回答率が低い問題が多く、粘り強く問題に取り組んでいることがわかる。また、必要なデータを取り出して分類整理する問題についての正答率が、全国平均を上回っている。一方で、「変化と関係」の領域についての問題では正答率が低く、課題である、
算数	よってきた問題	・計算の仕方を探求し、求め方と答えを式や言葉を用いて記述する問題 ・除数が小数である場合の除法の計算をする問題
	努力が必要な問題	・除数が小数である場合の除法において、除数と商の大きさの関係を理解する問題 ・速さの意味について理解する問題
	全体的な傾向や特徴など	国語科と同様に、全国平均と比べて無回答率が低い問題が多く、粘り強く問題に取り組んでいることがわかる。また、必要なデータを取り出して分類整理する問題についての正答率が、全国平均を上回っている。一方で、「変化と関係」の領域についての問題では正答率が低く、課題である、

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要

質問調査の結果分析	
多くの項目で、全国平均に対して「ほぼ同じ」もしくは「上回る」結果となった。自尊感情に関する項目では「自分には、よいことがある」と肯定的に回答した割合が85%以上、「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と肯定的に回答した割合が94%以上と、高い数値である。また、「人が困っているときには進んで助けている」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」に肯定的な回答をした割合が、いずれも95%を超えており思いやりの心がはぐくまれていることがわかる。一方で、「将来の夢や目標を持っている」と肯定的に回答した割合は、全国平均を大きく下回った。今後は、低学年より発達段階に応じてキャリア教育を実施しながら、一人一人の生き生きとした成長に努めていく。	
全国平均を下回る結果となった質問には「家庭学習の時間」「授業外でのICTを活用した学習」があげられる。「1時間以上家庭学習を行っている」児童が40%程度と全国平均を大きく下回っている原因の一つとして、家庭でのゲーム時間が全国平均よりも長いことが考えられる。学校から家庭にも積極的に情報発信や啓発を行うとともに、児童には家庭学習の目的や意義について適切に指導支援していきたい。また「ICTの活用」については、学校独自のアンケートでは肯定的な回答が多い。授業以外で、特に家庭での活用を促す必要がある。	

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組

国語科では、チャレンジタイムなどを活用して、ドリルやAIドリルを活用して漢字や語句の学習に取り組む。また、目的や意図に応じて、伝えたいことを明確にする力の向上に資するように、学習活動や教師の工夫を行っていく。算数科においては、「変化と関係」の領域を苦手としている児童が多いことから、AIドリルなどを活用して基礎的内容の確実な定着を図っていききたい。常に児童の理解度を把握し、適用問題や振り返りを通してより主体的に課題追究していく姿勢の向上を図る。

② 家庭生活習慣等に関する取組

一方的に宿題などの課題を与えるだけでなく、児童が自ら「学びを深めていきたい。」と思えるように指導支援の工夫を行っていく。また、年2回の家庭学習チャレンジ週間に合わせて、「家庭学習マイスター賞」の表彰を行うとともに、学習ノートの好事例を掲示するようにしている。